

福井の幕末明治 歴史秘話

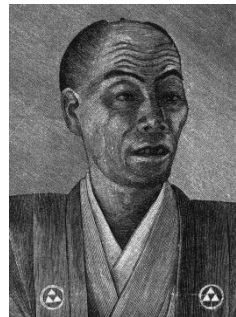
<第11号>

平成28年6月16日発行

蟄居中も天下国家を論じた横井小楠 ～土道忘却事件とその後の生き方～

幕末明治の福井の偉人、由利公正が師と仰いだ熊本藩士、横井小楠。今回は、小楠が一時期政治生命を絶たれた大事件とその後の生き方を取り上げます。

文久2年（1862年）12月19日夜、福井藩政治顧問の横井小楠が、熊本藩江戸留守居役吉田吉之助の別邸（現 東京都中央区）で、肥後勤王党の刺客に襲われました。小楠は大小の両刀を備えておらず、約1キロ離れた福井藩邸まで刀を取りに戻ります。しかし、小楠が戻った時には既に刺客の姿はなく、吉田は重傷を負っていました（2か月後、吉田はこの怪我が元で死亡）。熊本藩では、小楠が敵前逃亡し、土道を忘却したと憤り、福井藩に身柄の引き渡しを要求しました。



横井小楠肖像

松平春嶽はこれを拒み、一旦は福井に匿います。しかし、その後起きた福井藩の挙藩上洛計画の失敗により、文久3年（1863年）8月、小楠が熊本に戻ると、あらためて熊本藩の詮議を受けます。春嶽は穏便な処分を願い出ますが、熊本藩ではこれを拒み、小楠は士分や家禄をはく奪された上、沼山津（ぬやまず）の四時軒（しじけん）で蟄居することになりました。

蟄居中の小楠の暮らし向きは厳しく、福井藩はその状況を知ると生活費の援助を行いました。春嶽は100両の大金を送ったと言います。蟄居後も、小楠の自分も学び人を教えようとする熱意は衰えることなく、門人のほか農民などに対しても、講義を行いました。さらに、国の政治のなりゆきには常に気を配り、小楠の長女みやは、母から「お父様はどんな時でも天下国家のことを忘れなかったよ」と度々聞かされたと言います。諸藩有志の来訪や意見を問う密書も少なくなく、坂本龍馬が勝海舟の指示で数度にわたり沼山津を訪れた話は有名です（勝海舟は「天下で恐ろしいものを二人みた。それは小楠と西郷だ」と評しています）。蟄居の身にあっても、論策家としての彼の名は全国諸藩に響いていたのです。

小楠は、蟄居中、来訪した井上毅（後の文部大臣）に対して「いかに多くの知識を得ても、活用しなければ意味がない」と語ったと言います。理由は違いますが、由利も、文久3年（1863年）から蟄居となりました。ともに苦しいときを過ごし、国の行く末を思った師弟。王政復古後の維新政権の下で、徴士参与として、二人は政治の表舞台に再び登場することとなるのです。

～幕末ふくい歴史紀行～ [四時軒(しじけん)]

- ・熊本市にある小楠の旧居、四時軒。四季の眺めが素晴らしいことから、その名が付けました。坂本龍馬や由利公正のほか諸藩の有志らが訪れ政局を語ったと言われています。熊本地震で被害を受けた四時軒、復旧が望まれます。
- 住所：熊本市東区沼山津1-25-91（市営バス秋津小楠記念館前下車 徒歩3分）
- ※熊本市は地震への支援（義援金、寄付金等）を募集しています（詳しくは熊本市HPをご覧ください）。



横井小楠記念館
(四時軒)

★お知らせ 江戸東京博物館で「福井の幕末明治 先人の軌跡展」を開催します！

- ・6月19日（日）、東京都墨田区にある江戸東京博物館で開催（11:00～17:00）
- ・幕末明治期に福井、東京の両方で活躍した偉人等をパネルや様々な歴史資料で紹介。福井藩の大名屋敷や由利公正が提案・実現した「銀座煉瓦街」のジオラマが常設展示されている同館で、福井の偉人を発信します。